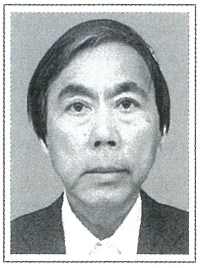
UPĀYA
ウパーヤ
四天王寺大学 仏教教育広報誌
令和３年９月１日
Vol.19

仏教と自然界



副学長
教育学部教育学科　教授
松岡　隆

昨年春ご縁に導かれて本学に参りましてから早１年余りが過ぎました。それまで聖徳太子の事績や仏教に殆ど触れる機会がありませんでしたが、特に「利他の心」は教育の本質の一つと大いに納得しているところです。

専門は数学と数学教育ですが、自然界の仕組みにも興味を持ち続けてきました。以前、仏教と現代物理学の考え方には相通ずるところがあるとのことを何かで見た記憶があり、今回調べてみたところ、思いもよらなかった仏教の姿に触れることもできました。理解の至らぬ点もあろうかと思いますがご容赦ください。

まず、仏教では、一つの世界が千個集まって小千世界を作り、それらが千個集まって中千世界を作り、さらにそれらが千個集まって大千世界を作り、大千世界自体が無数にあるとされています。数千年も前に、現代宇宙論の太陽系、銀河、宇宙、無数の異なった宇宙、といった階層構造にも似た壮大な発想を持ちえたことは驚きです。

物理学の発展によって、極微の世界から宇宙まで、数式で説明できる範囲は飛躍的に拡がってきました。しかし、真実が明らかになればなるほど、自然界の描像は不可解さを増していっているように思われます。暮らしに欠かせない基盤技術として利用されている量子論が明らかにした世界は、不思議な現象に満ちています。例えば、何も無いはずの真空では、至るところで粒子がつねに生成消滅を繰り返していると考えられていますが、この理論と色即是空の世界観との共通性を感じます。また、新しい暗号理論の基となる量子もつれは、極微の粒子が距離を超越した関係を持っているという驚くべき発見ですが、これは、すべての存在が無数の因縁で成り立っていることと関連があるような気がします。科学がようやく辿り着いた先が、仏教の世界観と似た世界であったことは実に興味深いことと感じます。

コロナに負けるな！

教務課長
松永　賢治

コロナウイルス感染症の感染拡大により、多くの影響を受けられた方々に、心よりお見舞い申し上げます。

現在、大阪府では、国による緊急事態宣言は解除されましたが、まん延防止等重点措置が発出され、20歳代の若い世代の感染者が増加傾向にある中で、まん延防止等重点措置が８月22日まで延長されることになりました。

キャンパスでは、許可制による入講が続き、授業は、大学ではハイブリッド授業（対面授業と遠隔授業の併用）で実施されています。クラブ等の課外活動においても許可を得た団体が学内限定での活動として制限されている状況です。

このような大学内での制限が続く中で、本学では、７月３日（土）に看護学部３年次生を対象とし、新型コロナウイルスワクチン接種を開始し、７月６日（火）からは学生ならびに教職員等本学で働かれている方を対象に新型コロナウイルスワクチン接種（職域接種）をスタートしました。

今後、市町村による若い世代への新型コロナウイルスワクチン接種がますます進むことにより、学内で安心・安全に過ごすことができ、授業等の学修活動（先生からの直接指導や、同級生と一緒に学び成長する楽しさを実感すること）など、クラブ等の課外活動（先輩・後輩との同じ目標をもってともに励むこと）などが全面的にできる日が一日も早く来ることを願っております。

私個人として申し上げますと、やはり学生の皆さんが大学にいない、ということはとても寂しいということを強く感じた１年間でもあります。学生の皆さんがキャンパスで友だちや仲間たちと一緒に学び、生き生きと大学生活を送ることがこれほどまでに素晴らしいことだったのかということを実感しています。私も学んだこのIBUのキャンパスに学生たちが当たり前に毎日登学し、仲間とともに毎日キャンパス生活を過ごされる日が早く戻って来ますよう切に願っています。

学園訓「誠実を旨とせよ」について ―「誠実」を先人に学ぶ―

国際キャリア学科学科長
教務副部長
人文社会学部 国際キャリア学科 准教授
奥羽　充規

今回、私は学園訓の１つである「誠実を旨とせよ」について、二人の人物の生き方を通して「誠実」であることについて考えながら、「誠実」であることの大切さ、そして強さについてご紹介していきたいと思います。

一人目の人物は竹中重治、そして二人目は石田三成です。二人とも豊臣秀吉の配下の武将として活躍した戦国武将です。

竹中重治の通称は半兵衛、豊臣秀吉の軍師を務めていた人物で、織田信長の配下の武将として秀吉が出世を果たすのに大きな貢献をした人物です。卓越した戦略家でしたが、1579 年に播磨三木城攻めの最中 36 歳の若さで病死し、秀吉の天下を見ることなくこの世を去りました。

石田三成は、豊臣秀吉の政権下で五奉行筆頭として、行政の中心的な役割を果たしていた人物です。秀吉の死後、関ヶ原の戦いで西軍を指揮しましたが、戦に敗れて最後は京都の六条河原にて斬首されました。そして、三成の死から 15 年後に大阪夏の陣にて豊臣家は滅亡します。

この二人に共通しているのは、先ず二人とも悲運の武将と言われ、その死を様々な人たちから惜しまれたことです。竹中重治の息子である竹中重門の著した『豊鑑（とよかがみ）』では、重治の死に際して、「秀吉限りなくかなしび、劉禅（劉備の子、蜀漢二代皇帝）孔明を失ひしにことならず」と記されており、秀吉は重治の早すぎる死に慟哭し、大いに悲しんだとあります。

また、その死後にも次のような出来事もあり、その存在の大きさを際立たせます。

竹中重治が存命中に、秀吉軍団配下の盟友である黒田官兵衛が、織田信長に謀反を起こした荒木村重の有岡城に囚われたため、敵との内通を疑われ秀吉が預かっている官兵衛の息子の松寿丸（後の黒田長政）の処刑命令が信長から出されてしまいます。官兵衛の無実を信じている秀吉は、その対応に苦慮し、重治にその処置を依頼しました。そこで、重治は病気で亡くなった童の遺体をもってその死を偽装して信長に報告し、彼の居城である菩提山城に松寿丸を匿（かくま）いました。重治の死後 6 か月後に、官兵衛が有岡城から救出され、重治の家臣から松寿丸が生きていることが知らされ、官兵衛と秀吉はもちろん、誤った指示を出した信長も感謝し、限りなくその死を惜しんだと伝えられています。

一方、石田三成はその死後、遺骸を春屋宗園と沢庵宗彭に引き取られました。沢庵は大根の漬物の「たくあん」の考案者としても知られる、臨済宗の名僧です。沢庵は関ヶ原の合戦後に佐和山を追われ、その後に豊臣秀頼や細川忠興、黒田長政ら豊臣の武将から招かれますが、三成を見捨てた者たちの招きをことごとく断ります。彼にとって、豊臣に尽くしてきた三成に対する豊臣恩顧の武将の裏切りや、三成の誠意を理解できず見殺しにした秀頼が許せなかったようです。沢庵が三成の治める佐和山の瑞嶽寺にいたのはわずか１年の間でしたが、三成との間に友誼や価値観の共有があったのでしょう。三成に受けた恩を返すかのように、柳生宗矩以外の招きは一切聞き入れなかったといわれています。

さて、これまで二人の戦国武将の紹介と彼らの死後にまつわる話をご紹介しました。竹中重治は、とかく戦の天才として周知されることが多いのですが、彼の得意とする戦の方針は「戦わずして勝つ」というものでした。舌先三寸で相手をだますのではなく、信義を大切にし、相手の立場に立ちながら多くの敵将を説得しました。いつ誰が裏切るのかわからない、家族や友さえ信用できない下剋上の戦国時代において、誠実さを武器にしてその言動に責任と説得力を持つことで、天才と呼ばれるほど味方を勝利に導いたこの武将の存在は、ある意味稀有と言えるでしょう。そして、先ほどの松寿丸の救出では、友を信じ、主君である秀吉と友である官兵衛に対して信義を貫いたのです。竹中家の存亡をかけて。

石田三成は、一般的な評価として「秀吉の威を借る横暴・陰険な小役人」のように語られることが多くありますが、1625 年に発表された『太閤記』で、小瀬甫庵は秀吉の言の中で「治部（三成）は諫めについて我が気色を採らず、諸事姿あることを好みしものなり」（たとえ主君に対してさえも意見を述べる際は堂々と述べ、おべっかなどは言わない。厳格に規律を守る）と述べています。歴史家の白川氏の表現では、このような人間を「直言居士」と言い、「一途で、愚直で、逆境に立つ人々への思いやりがあり、かつ変わり身の下手な人間」が多いのが一般的なようです。三成の人となりとは、まさにこのような人物であったと私は思います。秀吉亡き後、豊臣配下の多くのものが恩のある豊臣家を裏切り徳川家になびく世にあって、最期まで豊臣家に誠実に尽くしました。そして、そのような三成を最も評価していたのは徳川家康であったと思います。家康は「天下は強者のもの」とする戦国時代の論理で天下を掌握しましたが、同時に「徳川の天下をより長く安泰にて」と願い、石田三成と親交の深かった儒学者の藤原惺窩（せいか）に教えを乞います。つまり、自らが天下を取った後、必要だと感じたのは三成のような存在であると理解していたのです。

十七條憲法に「九に曰わく、信はこれ義の本なり。事ごとに信あれ。それ善悪成敗はかならず信にあり。群臣ともに信あらば、何事か成らざらん。群臣信なくば、万事ことごとく敗れん。」とあります。信とは誠実を指し、誠実であることが人の正しく生きる道であり、誠実のある無しにより物事の成否が決まるということです。石田三成は誠実でありながら、関ヶ原の戦いには敗れました。しかしながら、三成の如く誠実な人材の存在を勝者の徳川家康は羨（うらや）ましく思い、その教えを乞うために儒学者を訪れたのです。徳川家康が重用した林羅山の言葉です。

「身に誠あるの楽しみ、あに孝悌忠信（こうていちゅうしん）の外（ほか）にあらんや」
（誠実さを認められることが人間にとって一番の楽しみであり、それには立場に応じた正しい心がけを積み重ねる以外にない）
『吟風弄月論（ぎんぷうろうげつ）』

自らの部下にいればどれほど嬉しかったかと思いながら、三成を処刑した徳川家康もまた、誠実である人材の大切さを重々理解していた人物なのでしょう。結果、下剋上の戦国時代は終焉に向かいました。

今回紹介した二人の人物はもちろんのこと、他の多くの歴史上の人物からも「誠実」の大切さについて学ぶことが出来ます。いつの世であっても「誠実」であることはそれ自体が美徳であり、人間としての大きな力です。誠実であるからこそ、人はその言葉に耳を傾け、そして共に友として動くのではないかと思います。先人にあやかり、より「誠実」な生き方を実践したいものですね。

「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。当然、学科専攻も問いません。

これまで第４面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲載するなどの活動をしてきました（本号では新型コロナウイルスの影響で学生編集員による取材が行えなかったため、同欄に上野舞斗研究員の「達磨寺」を載せています）。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいたこともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第４面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。　（中田　貴眞）

第19回 卒業生インタビュー

話 し 手：赤藤誠（あかふじまこと）阪南市立尾崎小学校教諭、赤藤彩佳（あかふじあやか、旧姓：谷内）岬町立深日小学校教諭
共に平成29年3月 教育学部教育学科 小学校・幼児教育コース卒業
聞 き 手：坂本 光徳（和の精神Ⅰ・Ⅱ導師・人文社会学部人間福祉学科専任講師、本欄編集）

今回は、共に本学教育学部の卒業生で昨秋に結婚された赤藤誠（以下、誠）赤藤彩佳（以下、彩佳）夫妻に卒業生インタビューをしました。コロナ禍で延期していた結婚式も今年7月に挙式されたそうです。

仕事について

（誠）卒業して、藤井寺市と阪南市の小学校に計3校勤めました。現在勤務しているところは2年目となり、3年生の担任をしています。学校によって、子どもたちの様子や家庭の状況があまりに違うので、勉強のことはもちろんですが、それ以外も色々と手段を考えて工夫をしています。やりがいはすごく有ります。時間的にも体力的にもしんどい部分はありますが、子どもたちの様子や成長が見られるので、続けられるというところがあります。また、それを嬉しいと感じる、喜べる人が、この仕事を続けられるのかと思います。

（彩佳）卒業してから同じ小学校に勤めて5年目となります。現在5年生を担任しています。小規模の学校で一学年10人程度の学校のため、子ども同士の関係性ができているところに担任として新しく入って、どう変化させていくかというところが難しい反面、楽しいところでもあります。また一部教科担当制も取り入れているのが特徴で、私も担任以外で音楽や家庭科の授業をすることがあります。学校全体で子どもたちを見守っていくという仕組みです。

コロナ禍では、消毒作業が増えたり、感染抑制のため授業の組み方が変わったりしました。ただ悪いことばかりではなく、PC導入など、ICT活用が進みました。地域学習をオンラインでゲストティーチャーと関わるなど新しい方法が導入されたりもしました。

礼拝について

（誠）礼拝で週1回、スーツを着てピシッとしなくてはという感覚が得られるところが良かったです。大学生はそれまでの制限から解放されて自由になり、やはり気が緩みます。あまり落ち着けるタイプでもないので、週1回の礼拝は自分の中で集中しなければと切り替える機会となり良かったです。講話も最初の頃はよく理解できなかったのですが、だんだんと分かるにつれて、自分の中に貯まっていくものがありました。それらが生活に影響していて、この学校で学んで良かったと思えるようになっています。今でも書写の授業では最初に瞑想を子どもたちと実施しています。

（彩佳）私は、写経の時間が結構好きでした。字を書くのも好きなのですが、落ち着いた環境で集中してその事だけに取り組み、書くというのが良かったです。今は落ち着いて一つのことに集中して取り組むことが難しく、色々なことを考えながら物事をしています。だから集中して一つのことに向きあえた礼拝は良い時間だったと思い返します。

学園訓について

（誠）父母の恩について考えることが多くなりました。在学中に、親元離れて一人暮らしした時は、自分一人で生きていくのは大変だと感じました。自分で稼いだお金で生活するようになった時も、すごく大変だと感じ、いざ結婚して一緒に生活する時は、もっと大変だと感じるようになり、段々と親の苦労が分かってきました。昔はこれほど親のことを考えることはなかったです。

学校の子どもたちは、どう親の事を考えているのかなと思います。自分の経験から年を重ねれば気づくものとは分かっているのだけれども、今から何か思ってもらえたらということを考えながら接しています。

（彩佳）大学の先生に教えてもらったり、自分で経験したりしたことを、子どもたちに伝えています。やっぱり誠実は大事とか、礼儀が必要な場面があるとか、健康が大事だとか、自分が教師として教えたいと思うことです。学生時代にはあまり気にも留めていなかった学園訓に、それらが文字として書かれていると改めて気づきました。

色々な人がいて皆同じではない、違いを認め合って楽しく過ごしていくことが大切であるという、いわゆる和の教えは、小規模な学校なので卒業後色々な人と出会うことを考えると、是非伝えていきたいです。学園訓を見返すと自分が今まで教えてきたことが、やはり間違っていないと感じますし、大学時代に自然と教えてもらい、学んでいたんだと思います。

在学生へのアドバイス

（誠）大学生が持つ自由をどのように使うかということを考えてほしいです。楽しむことは大事だけど、将来の自分のために勉強することも必要です。ガッツリ遊ぶのも良いけど、そればかりでは将来的に困るということです。しかし結局は何年か働くと、「もっと遊んでおけば」「もっとちゃんと勉強しておけば」の、どちらかの後悔が絶対でてきます。ただその後悔を少しでも減らせるように、自分のやりたいことをして欲しいです。今、自分がやりたいと思うことは時が過ぎたときに出来るか?ということを考えてほしいです。今やりたいことをしっかりと挑戦して、後からできなかったと悔やまないでほしいです。

（彩佳）時間的に余裕があるので、自分がしたいことは大学生の間にやった方が良いと私も思います。私自身、勉強や吹奏楽部、サークル、バイト、ボランティアなど色々な経験ができました。大学時代に自分のしたいことをしっかりとやると、働いてからも、その力を生かすことや、もっと稼いで自分でこんなことしてみたいと将来の自分に繋がる活力になります。教師を目指す人はもちろん他の職業に就く人も、大学時代は自分を見つめることができる最後の時間です。今の時間は無限にあるわけではないので、健康にも気を付け楽しみつつ、大学生活を頑張って過ごして欲しいです。

「和の精神Ⅰ」令和3年度 夏学期 礼拝 講話

4月8日　奥羽 充規先生「受講こころえ―授業規律に関して」
　　坂本 光徳先生「礼拝の作法について」
4月15日　岩尾 洋学長「建学の精神―「こころえ手帳」・「瞑想について」」
　　藤谷 厚生先生「『ウパーヤ』について」
4月22日　坂本 光徳先生「読経と写経について」
　　伊達 由実先生「学生生活を送るにあたって」
4月29日　杉中 康平先生「『和の精神』を学ぶ意義」「「学園訓の実践」エピソード入力について」
5月6日　藤谷 厚生先生「四天王寺学園、建学の歴史」
5月13日　成田 由岐子顧問弁護士「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」
5月20日　石田 陽子先生「仏教聖歌、なぜ聖歌を歌うのか？」
5月27日　仲谷 和記先生「コロナ禍 感染予防について」
6月3日　坂本 暁美先生「「学園歌」―作詞家と作曲家からのメッセージ」「グローバル教育研修」
6月10日　奥羽 充規先生「学園訓―誠実を旨とせよ―」
6月17日　南谷 美保先生「仏像を知ろう―仏様に会いに行くとは？―」
6月24日　矢羽野 隆男先生「学園訓―和について―」
7月1日　笠原 幸子先生「キャリアと和の精神 今、何から始めますか？」
7月8日　高橋 麻紀子課員（保健センター）「薬物乱用と薬物依存を防ぐために」
7月15日　奥羽 充規先生「授業を振り返って」

「和の精神Ⅱ」令和3年度 夏学期 礼拝 講話

4月8日　岩尾 洋学長「写経の効果」
　　藤谷 厚生先生「『ウパーヤ』について」
　　奥羽 充規先生「オリエンテーション」
4月15日　牧野 浩二先生「礼拝写経〈前編〉」
4月22日　杉中 康平先生「学園訓の実践」「エピソード入力について」「礼拝写経〈中編〉」
4月29日　牧野 浩二先生「礼拝写経〈後編〉」
5月6日　坂本 光徳先生「写経について」
5月13日　南谷 美保先生「写経と「経供養」」
5月20日　李 美子先生「不肖去観音について」
5月27日　伊丹市小学校校長 村上順一氏（教育学科卒業生）「これからの時代を生きる ～今 何を学ぶか～」
6月3日　奥羽 充規先生「「納経」の勧め―巡礼の視点から―」
6月10日　矢羽野 隆男先生「学園訓「誠実」について」
6月17日　上續 宏道先生「「和顔愛語」について」
6月24日　石田 陽子先生「自分と出会う―静寂の意味とは―」
7月1日　原 祐子先生「今日も生きる」
7月8日　中田 貴眞先生「学園訓―礼儀について―」
7月15日　奥羽 充規先生「授業を振り返って」
（※上記日程は木曜授業、その他月曜、水曜授業も同様に実施されました）

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

―達磨寺（奈良県北葛城郡王寺町）―

JR関西線王寺駅から国道沿いを南に10分ほど歩くと見えてくるのが、達磨寺（だるまじ）です。禅寺ですが、聖徳太子霊場第19番札所に数えられており、ここにも聖徳太子にまつわる伝説が残っています。

『日本書紀』はこの伝説を次のように伝えています。613（推古21）年、太子が道に行き倒れになっていた飢えた旅人を見つけました。哀れに思った太子は衣食を与えてやりましたが、翌日、その飢人（きじん）は亡くなってしまいました。このことを大いに悲しんだ太子は飢人の墓を作らせ、厚く葬りました。数日後、墓を確認してみると、埋葬したはずの遺体が消え、棺の上に与えた衣だけが畳んで置いてあったのです。のちに、この飢人が禅宗の祖と言われる達磨大師の化身であったと考えられるようになり、この達磨寺が建立されました。

このように聖徳太子と達磨大師の出会いから始まった達磨寺には、今も本堂の下に「達磨塚」と呼ばれる古墳時代の円墳があります。これこそが太子が飢人のためにお造りになった墓だと考えられています。

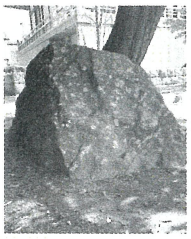
「達磨塚」の上には平成になって建て直された立派な本堂があり、堂内正面には、ご本尊として千手観音像、右手には達磨像、そして左手には聖徳太子像が安置されています。

また本堂の西側には、2つの大きな石が10m程度の距離をとって並んでいます。それぞれの石は「太子石」「達磨石」と呼ばれており、それぞれの位置する場所で聖徳太子と達磨大師が出逢い、ここで互いに歌を詠み交わしたと伝えられています。これらの歌は『拾遺和歌集』に収められています。

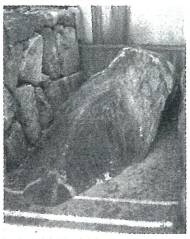
聖徳太子坐像（重文）

達磨坐像（重文）

しなてるや 片岡山に飯に飢ゑて
　　臥せる旅人 あはれ親なし　聖徳太子
斑鳩や 富の小川の絶えばこそ
　　我が大君の御名を忘れめ　飢人［達磨大師］



太子石



達磨石

紙幅の都合でこれ以上は紹介できませんが、他にも聖徳太子の飼い犬・雪丸のものとされるお墓（雪丸塚）や、戦国時代の名将・松永久秀のお墓、達磨大師が抱えていた竹の杖を土に刺したところ一夜にして竹の芽が出たという伝説の残る一夜竹など、境内には数々の史跡が点在しています。是非一度お参りしてみてください。

（上野　舞斗）

仏教のことば

― 縁起（えんぎ） ―

よく仏教は、縁起の教えであると言われます。釈尊自らが、「縁起を見る者は法を見る。法を見る者は縁起を見る」（中阿含経）と述べられているように、仏教の教えの中核は、縁起の理法を説くことにあるとも言えます。この縁起［Pratītya-samutpāda］という言葉は、因縁生起という言葉の略語とされています。因縁生起とは、「世の中の現象や事物は、すべて因（原因）と縁（諸条件）が互いに関係して、生じたり起こったりする。」という意味です。一般的には、物事の原因と結果の関係を因果関係と言いますが、仏教ではそこに関わる「縁」というものを特に重視します。つまり原因は同じでも、そこに係わる諸条件が変われば、結果もいろいろと変化してくるというのです。従って、因もさることながら、条件としての「縁」がとても重要になってくる訳です。また一方で、良い「縁」に巡り会えることも大事なのですが、同時に因としての私自身の行いやあり方も、良いようにあるように努めなければ、決して物事はうまくは行かないとも言えます。このように社会や私たちの人生の動きの根底には、実は縁起の理法が働いているということを、しっかりと見据えて、私たちの人生や社会のあり方がより良いものとなるように、精進していくことが肝要だと、仏様はお説きになっておられる訳です。

（藤谷　厚生）

編集後記

「コロナ時代」と呼ばれた1年以上の期間を経て、本学でもワクチンの職域接種が行われました。この時代ができる限り早く真に終わりを迎えることを願います。この時代の苦難を振り返るとき、改めて気づかされたことがあります。

ウパーヤ19号では、奥羽先生が学園訓「誠実を旨とせよ」について書かれています。このような状況下で、私たちの「誠実」と「信頼」が問われることとなりました。遠隔授業では、教員は学生が対面でサポートを受けられる機会が制限されている中で課題に取り組み、学修を深められることを信頼してきました。同様に、学生は困難に陥ったとき、教員の思いやりと理解を信じて学業に励み、学生生活を送ってきました。私の場合、学生たちは私の信頼に「誠実」と「精進」で十分に応えてくれましたが、多くの学生や教員が同じような経験を通して、相互の信頼関係を強くしてきたのではないでしょうか。

本号を読まれたことが、真摯な姿勢と信頼の重要性を再認識する機会となっておりましたら幸いです。今後も学生の皆さんと一緒に、私も精進していきたいと思っています。（エリック　マーティン）

研究所員紹介

所　　長　岩尾　洋（学長・教授）

主任研究員　藤谷　厚生（教授）

研 究 員
石田　陽子（教授）　上續　宏道（教授）
南谷　美保（教授）　矢羽野　隆男（教授）
杉中　康平（教授）　奥羽　充規（准教授）
李　美子（准教授）　坂本　光德（専任講師）
中田　貴眞（専任講師）　エリック　マーティン（専任講師）
上野　舞斗（助教）　南谷　憲敬（客員教授）

客員研究員　桃尾　幸順

UPĀYA（ウパーヤ）19号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

令和３年９月１日 発行
発　行　四天王寺大学
　　仏教文化研究所 仏教教育センター
所在地　大阪府羽曳野市学園前3丁目2−1
　　TEL:072-956-3181（代）　FAX:072-956-9940
　　URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPĀYA（ウパーヤ）」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail bukken@shitennoji.ac.jp
（件名は「ウパーヤ」としてください）